

集団におけるフロー体験の生成過程に関する研究 — 神楽の相互作用のパフォーマンス分析から —

迫俊道〔大阪商業大学〕

キーワード：フロー、神楽、生成、相互作用

これまでのフロー研究

M・チクセントミハイは「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉」（チクセントミハイ, 1991, p.66）として定義されるフロー概念についてまとめた最初の著書、*Beyond Boredom and Anxiety*を1975年に上梓した。日本では、スポーツ社会学者の今村浩明により1979年に邦訳『楽しみの社会学』が刊行され、以後フローに関する論説等は技能水準と挑戦水準の二軸によって表される「フローモデル」を引用、援用する形でかなりの数が執筆されてきた。2003年には『フロー理論の展開』という日本におけるフロー研究のアンソロジーともいえる研究書が出版されている。同書に所収されている各章の論文のタイトルは「フロー理論のこれまで」「フロー経験と身心合一」「スポーツ行動論としてのフロー理論の可能性」「自然体験活動におけるフローと身体アイデンティティ」「知識労働者の時代における企業の経営戦略としてのフローの意義」「フロー経験と日常生活における充実感」「中年期女性の日常余暇場面におけるフロー」「芸北神楽におけるフロー」「フロー理論のこれから」である。これらを見てもフロー研究のテーマとして様々なものがあることがわかる。

チクセントミハイは先に挙げた自身の著書の中で「本書で述べられる研究は、楽しさの経験と、その経験を生み出すものの構造とを、可能な限り分析的、客観的に記述しようとするものである」（チクセントミハイ, 1991, p. 8）と自らのフロー研究の内容を述べている。同書ではチェス、ロック・クライミング、ロックダンス、外科医が主にフロー研究の対象として挙げられ、楽しさの経験については主に面接調査の結果から、各活動においてフロー体験が生じているときの感覚を描き出している。そしてフロー経験を生み出す構造として、前述したフローモデルが提示されている。その後に着されたフロー体験に関するチクセントミハイの邦訳『フロー体験 喜びの現象学』（1996）においては取り上げられる事例の種類が増加し、多岐にわたるフロー体験が紹介されている。

フロー研究における課題

本報告者はこれまでに日本の芸道に着目したフロー研究、具体的には能、剣道、弓道などの日本の伝統的身体技法におけるフロー体験について考察してきた。また広島県で大変な隆盛をみている芸北神楽についてインタビュー調査を行い、舞手、楽人、観客の言説を提示する形で、神楽におけるフロー体験の内容を明らかにしようとしてきた。管見の限りではあるが、本報告者のこれまでの研究も含めて、フロー研究の多くはフロー概念を通じて捉えられてこなかった分野を対象としたインタビューや因子分析などの手法によって、それぞれの活動の特性をフロー理論との関わりから明らかにしようとするものが多かったと思われる。フロー理論そのものの課題を指摘し、それを乗り越えようとした数少ない考察としては、社会学者の亀山佳明による研究が挙げられる。亀山は先に示した日本におけるフロー論文集ともいえる『フロー理論の展開』の第2章「フロー経験と身心合一」にお

いて、チクセントミハイのフロー理論の枠組に依存することなく、新たなフロー理論の図式を提示する試みを展開した。さらに亀山は『生成する身体社会学—スポーツ・パフォーマンス／フロー体験／リズム』の中で共同体におけるフロー体験を「リズム論」の見地から分析している。しかしながら、これまで集団的な活動から生じるフロー体験については個々人のインタビュー調査の結果が部分的に提示されることはあっても、集団的なフロー体験そのものを対象として考察する事例研究はほとんど行われてきていない。

本研究報告の方法・対象・内容

神楽を事例とした本研究は、神楽組織（芸北神楽が行われている地域では「神楽団」と呼ばれる）の構成員に対するインタビュー調査および神楽の練習の様態を撮影した映像資料のデータから、特に神楽の相互作用のパフォーマンスに着目し、集団のフロー体験の生成が目指されていく過程を分析することを目的としている。本研究で対象とするのは広島県の安芸高田市で芸北神楽を伝承している神楽団である。研究対象としている芸北神楽は主に複数の舞手、囃子（大太鼓、小太鼓、手打鉦、笛）を担当する楽人によって構成されている。演劇的要素が色濃く、多くの観客を集める文化的活動として注目され、近年では関東方面での公演活動も積極的に行われるようになってきている。

対象となった神楽団関係者へのインタビュー調査および神楽の練習様態の映像収集は、2013年2月から開始した（2013年9月現在も継続中である）。本研究報告では観客に対してそれぞれの演目における物語の情景を伝えるためにいかにして舞（動き）と囃子（奏楽）を合わせるのかという課題について尋ねたインタビュー調査の内容およびデジタルビデオカメラによって収集した練習の映像という、練舞場と呼ばれる神楽団の練習場でのフィールドワークから得られたデータを精査することで、神楽の他者（舞手と舞手、楽人と楽人、舞手と楽人など）との相互作用のパフォーマンスの分析を行う。なお、インタビュー内容や映像資料から得られた情報についての詳細な分析結果については学会発表当日に報告する予定である。

付記

本研究報告中で使用するインタビュー調査および神楽の練習・公演に関する映像資料の収集をとまなうフィールドワークは、平成24年度・平成25年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所のプロジェクト研究「集団におけるフロー体験の生成過程に関する研究—神楽の相互作用のパフォーマンス分析から—」の研究助成を受けて行われたものである。

文献

- チクセントミハイ. (1991). 楽しむということ, (今村浩明訳). 思索社.
- チクセントミハイ. (1996). フロー体験 喜びの現象学, (今村浩明訳). 世界思想社.
- 今村浩明・浅川希洋志編. (2003). フロー理論の展開, 世界思想社.
- 亀山佳明. (2012). 生成する身体社会学—スポーツ・パフォーマンス／フロー体験／リズム, 世界思想社.
- 亀山佳明. (2012). 書評に答えて. スポーツ社会学研究, 20 (2) : 89-91.
- 迫俊道. (2010). 芸道におけるフロー体験, 溪水社.